

(社)日本建築協会「建築と社会」2005.8 書評

地球環境時代の建築と横断的思考

濱 恵介

「建築デザインと環境計画」

柏原士郎編著

朝倉書店

この書は建築と環境の関係を案内する一種のガイドブックである。従って、知りたいと思う部分だけを読むことも可能だが、私は全体を読み通し理解することに意味があると思う。その理由は後で述べる。

全体の構成は次のようになっている。まず建築と「環境」のかかわりが語られる。編著者の思想、特に地球環境と建築の関係が随所に感じられる。次に建築の「構成要素」(各部位)と環境の関係が述べられる。さらに視点を逆にして、光・音・空気・熱などの「環境要素」を基点にそれらの利用又はそれらから防御など建築としての対応が書かれている。

建築から環境を、環境から建築を相互に見ることで要素間の関係性を解明するのに加えて、省エネルギー、環境共生、環境の管理、高齢者対応という今日的な課題を取り上げ、建築と環境の包括的な展開を論じている。

そして最後には、いわゆる「建築原論」の基礎を集約的に掲載し、この書をしめくくっている。当然、巻末には索引が付される。

柏原先生から書評を依頼され、この本を最初から最後まで注意深く読み通すことになり、図らずも大変勉強になった。これまでの自らの活動を振り返り、「本当にそのとおり」と同感したことが多かったし、「そこまで理解していなかった」と反省させられたことも少なからずあった。そして、もう少し早い時期(実務をこなしていた頃)に「もっとこの種の勉強をすべきだった」という思いが残った。

第3章の環境要素以降は分野毎の識者によって執筆が分担されているが、その割には統一感があり、編者の力量が伺われる。

写真が非常に多いことを大いに歓迎する。ひとつひとつの写真が小さいのは限られた紙幅の中に多くの事例を紹介するためやむを得ない。いや、むしろ実物を見たいと思わせるためには望ましいことかもしれない。略図も分かりやすく理解を助ける。

風土を異にした海外の事例紹介が多く、環境が建築に与える影響と対応の姿を知る参考になる。また、回転ドアの事故など、最新の情報も含まれている。

記述は基本的なことが多く、表現はおおむね平易である。参考文献リストが充実しているので、より深く理解したい場合には、これらを参照できる。ともあれ、読み進むに従って、建築の各部位と環境要素の関わりについて理解が深まる。

欲を言えば、建築・環境に関する各分野の要求が相反する事例紹介と、それらにどう対処するか、と言う判断材料がもっと欲しかった。例えば、美学的には外壁に濃い色を使いたいのが夏の過剰な受熱が問題となるケース。高齢者の安全性・快適性・モビリティ確保のため比較的高い室温・明るい照度・追加的動力などにエネルギー消費が増えてしまう問題。あるいは建材の機能と生産・輸送に要したエネルギー消費や環境汚染の関係、などへの言及である。

建築本来の美と機能を満足しかつ環境への負荷を極力小さくすることは、言葉で表現するほど簡単なことではない。恐らく個人の学習だけでは追いつかないし、重要な判断に短期的な経済性が優先してしまうことも起きる。環境性と経済性を両立させるには、税制など環境に良い設計を優先させる制度や長期的に見て正確な情報にもとづく合意形成が不可欠であろう。

どのような状況にあっても、正しい知識と洞察力で問題発生を未然に防ぐ総合的な判断能力が、いよいよ建築のリーダーに求められよう。彼らは環境問題の所在と理由を実感できなければならない。それには、建築を横断的な視点から理解する必要がある。「この書は読み通すことに意味がある」と最初に述べたのは、この横断的思考能力を自分のものにするためである。

建築の各分野の境界は勿論、建築の枠さえ越えて取り組むべき課題は多い。景観、省エネルギー、ユニバーサルデザイン等がそうであるように、ここで主題となる「環境」はその最たるものであろう。

地球温暖化を始めとする環境問題が深刻化している今日、建築設計は空間的なデザインだけでなく、熱・光・空気・水・素材などあらゆる要素を横断的にとらえる力量をこれまで以上に求めている。特に建築デザインをエネルギーの消費と関連付けてイメージすることは、意匠・構造を問わず極めて重要である。

以上のような意味から、本著は建築を目指す学生にとって格好の入門書・参考書であるばかりでなく、すでに各分野でプロとして活躍している建築関係者にとっても、建築を総合的に捉えなおすためにお勧めしたい好著である。

(はま けいすけ / 大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所 研究主幹)